



第 11 号

2014年11月20日

会 員 募 集 中
 年 会 費 二 千 円
 十 月 以 降 入 会 千 円

全国歴史研究会全国大会 福井に十五名参加

全国歴史研究会全国大会が十月十七日～十九日、福井市で開催された。全国から二百五十名、岡山から十五名が参加した。

記念講演は二題①幕末福井伝く松平春嶽をめぐる人々。講師は角鹿尚計氏②越前から皇位についた継体天

皇伝説口マン。講師は青木豊昭氏。

祝宴・交流会ではおかやま観光コンベンション協会の法被で全国トップに登壇し岡山をアピールした。

二日目見学会(越前地方)

岡山県歴史関連団体調査

全県下を網羅す

岡山県下の歴史関連団体調査を昨年の第一次調査に続き第二次調査を実施した。

結果、第一次調査分(六十二団体)を合わせて百五十二団体となり、多くの方々のご協力で県下二十七全市町村を網羅できた。

ご協力に厚く感謝申し上げます。今後の計画

①十二月、団体一覧をホームページに公開。

- ① 一乗谷朝倉氏遺跡(戦国武将朝倉氏五代の栄華の跡)
- ② 養浩館庭園
- ③ 丸岡城(日本最古の天守閣)
- ④ 称念寺
- ⑤ 大安禅寺を見学。

三日目見学会(若狭地方)

- ① 明通寺
- ② 若狭縄文博物館
- ③ 水月湖(年縞、奇跡の湖)
- ④ 武田耕雲斎等墓と松原神社
- ⑤ 気比神宮(北陸の総鎮守)を見学。

三日間晴天に恵まれ歴史の宝庫を見学できた。参加者からは「また、ゆっくり福井に行きたい」との声。来年は鳥取県で開催される。

- ② 来年五月、冊子を一千冊作成。
- ③ 来年六月、冊子を調査協力団体、県下の公立図書館(九十八館)、県下二十七全自治体、岡山歴研会員、全国歴研団体等に配布。

利用・活用

これにより団体相互の情報交換・ネットワークの拡大、更には会員の増員、又、団体や行政が開催する講演会、イベント等の案内・広報にも活用できます。

歴研展望

今年もあと一月余となりました。岡山歴研も設立五年目に入ったことから、向

かうべき方向を考える時になりました。大きく二点あります。定期総会の講演テーマについて、NHK大河ドラマから県下の先人達に焦点を当てて顕彰し、後世に伝える方向へ、まずは来年度の定期総会で「山田方谷と吉田松陰の門下生」で岡山の三島中洲を中心に据え、高杉晋作も取り上げてすこし舵を切っていきたいと思えます。

もう一点は、探訪会の行先について、古代吉備国エリアをひとまず済ませたので、来年度からは県内中心に実施してはと考えています。この会報も活動の充実に伴って、今回から紙面を六頁から八頁に増やし、内容の充実を図っていきます。

歴史関連団体調査も県下の二十七全市町村を網羅して終了できました。歴研発展に皆様方の更なるお力添えを宜しくお願いたします。(会長 天野勝昭)

荒木村重の子孫

荒木文十郎
ふんじゅうろう

薩摩の武士を斬る

岡田藩(現倉敷市真備町)の俚謡(りよう・里唄)として次の詩が伝えられている。

畑岡に(や)さつまの蔓が延びす
ぎてつじを止めたる(か)荒木文十
畑岡(地名)のさつま芋の蔓が徒
長するので荒木文十がしんを止めた
ということにかけて、九州の薩摩藩
が増長するので、荒木文十郎がその
鼻柱を折ったと風刺したものである。

江戸に幕府が開かれて、約一世紀



▶荒木文十郎の墓と碑(三島中洲撰文)

半。世の中が落ち着いてきた、天明七年(1787年)五月に事件は起きた。場所は畑岡(現倉敷市真備町尾崎)。畑岡は山陽道の道筋にあつた。折しも薩摩藩主、島津侯の帰国の道中で、道中家老より岡田藩へ通行の前触れがあり、道筋は嚴重に警戒されていた。畑岡の道筋には旅人が小休止する茶屋があつた。その茶店の取り締まりは岡田藩の町奉行の支配に属していた。

丁度その日、亭主の庄兵衛は留守で妻の竹が店番をしていた。薩摩藩の先触れの侍二人が休憩のため立ち寄り、焼酎を飲み、代金三十二文の支払いに大金の一分金をだした。竹は両替ができないので次の機会にと断つた。が、薩摩の侍は両替せよとしつこく迫つた。困り果てた竹は隣家で両替商を営む荒木文十郎を呼んで両替を依頼した。

文十郎が店に来ると、件の侍の言いは金一分を銭一貫五百匁に変えろということであつた。文十郎は地方の取引相場でなら両替するが銭一貫五百匁は当地の相場でないので断つた。そして、いろいろとりなしたが相手は侍、ことに焼酎の勢いで氣勢が上がるので一旦自宅に引き下がった。

残つた竹は困り果て、再び出向いて文十郎に助けを乞うた。再び出向いて機嫌よく出立してもらうべく言葉尽くしたが聞き入れられず、次第に声高かになり、「表へ出る」いうことになり、文十郎を戸外へ引張り出した。そして、ひとりの侍が抜き打ちに「無礼者ツ」と切りつけて来た。次の瞬間、文十郎は身をかまし、侍の腕をつかみ、一方の手で刀を奪い、切り込んだ。侍は、二度は小刀で受けたが肩先へ切り込まれてそのまま息を絶つた。

同行の一人の薩摩武士は何を思つたか、脇差の小刀を拾い取り、一目散に矢掛へ向かつて駆けて行つた。文十郎は血刀を掲げて路上に突つ立ち、「薩州侯のお侍を討ち果たしたるは身どもにて文十郎と申す者、ご



◀薩摩武士、江藤金左衛門の墓

同藩の好をもつて復讐の御意志あれば勝負あるべし」と叫んだ。

しばらくして文十郎は刀を掲げたまま自宅に帰り、両親や妻子に事情を話した後、裏口から経納山の方へ上がつて行き、姿を消した。

畑岡に出向いて待機していた村役人たちは死骸を片寄せて小砂をまいて掃き清め、薩摩侯の行列は何事もなく矢掛を目指して通り過ぎた。

荒木文十郎の先祖は戦国時代の武将、荒木村重といわれている。曾祖父、荒木伝兵衛は水内村(総社市原)から尾崎村へ棲みついた農家である。庄屋を勤めたこともある。文十郎は畑岡へ出て両替を業としていた。文十郎は若い頃、叔父から剣術を習っていた。叔父、荒木団蔵は江戸の剣客滝野勇見の流儀で、俗にいう免許皆伝の腕前であつたというから



▲荒木文十郎屋敷跡

文十郎も相当の腕前だったろう。

その心得から、正当防衛で相手の刀を取り、薩摩武士を斬り殺した。士農工商の身分制度の厳しい中で、農民ながら武士の理不尽をはねのけ、自らの命を守った。

矢掛へ奔走したもう一人の薩摩武士は自分の卑怯を恥じ、矢掛宿で自殺した。

又、道中家老は責任を感じ、薩摩に帰った後、自殺した。

岡田藩の役人は文十郎の処置に迷ったようで、領分境で召し取り、牢に入れたと、早朝、速打(袋打)で矢掛宿にいる薩摩役人に知らせた。薩摩役人から届いた返書によると

一、文十を召し取り入牢申し付け
一、文十の飛札を受け取った。
一、文十の身柄を薩州へ引き渡すべきやの

A.. 荒木文十郎屋敷跡

B.. 荒木文十郎の墓と碑

C.. 薩摩武士、江藤金左衛門の墓



掛け合いはその儀に及ばず。

一、文十初めその他の関係者の仕

置きは岡田藩法によって処断されたい。
一、文十が持ち帰った刀は岡田の方で適当に処分してくれてよい。

一、仕置きの結果は大阪の薩州蔵屋敷まで知らせてくれればよい。

一、突発した事件のため岡田の役人方にだんだん苦勞をかけて恐れ入る。骨折りによって早く一段落したことを祝着に思っている。

岡田藩法に任すとのこと。任せられるほど難しいことはない。ましてや相手は大藩、薩摩藩である。茶屋の

備中倉敷学 例会案内

一月例会

日時 一月八日(木) 午後二時

講演「真備の人物荒木文十郎他」

講師 倉敷市文化財保護課 学芸員 藤原憲芳氏

二月例会

日時 二月十二日(木) 午後二時

講演「戦国武将荒木村重の真実」

講師 村重研究者 竹本弘子氏

三月例会

日時 三月十二日(木) 午後二時

講演「岡山のみちづくり 歴史とこれから」

講師 国土交通省 国道事務所 所長 渡邊良一氏

※ 毎月第一、三、五曜日 午後二時

※ 場所 倉敷市民館 大ホール

※ 参加 無料(申込不要)

※ 主な活動 講演会と見学会(会員限定)

妻に頼まれたとはいえ、義理を尽くさず、侍を斬り殺し、その場を立ち去ったのは不埒至極であるとして文十郎は死罪を申し付けられた。そして六月、妻子を遺し、検視役人に懇

洲)に依頼して碑文を書き、石碑を建てた。そして在天の靈よ以て瞑したまえと。時に事件発生後一世紀半である。(楠 敏明)

懇に会釈し、荒庭の上に座り小田川の河原で草の露と消えた。時に、文十郎三十一歳。

(追記) 真備町尾崎の塩田寛治氏の著書『荒木文十郎記』(五十九頁)を元に、故・三宅敏治氏が冊子『荒木文十郎記の写し』(三二頁)を作成しました。

時は移り、明治の時代となり、四

冊子の購入は山本までご連絡ください。三百円(税込)です。

民平等の世となった。明治四二年、その子孫、荒木忠一郎は文十郎の無実の罪を晴らそうと三島毅(号は中

090・4576・6955(山本)

地理学 の先駆者 古川古松軒 (一七二六—一八〇七)

岡山人物銘々伝を語る会 大瀨 文男(会員)

地理学の先駆者として全国に名をはせた古川古松軒の業績は意外と評価されるのが少なく、私は常々不思議に思ってきました。その中に

あつて、昭和五十一年の岡山県立博物館特別展「近代科学をひらいた人々」はかなりの反響を与えたと言われています。当時の学芸員、竹林栄一氏の尽力により、古松軒に少しは光が当たりました。

簡単に古川古松軒を紹介します。

◎生い立ち並びに業績

古松軒は備中国下道郡新村(現、総社市新本、旧岡田藩)古川讓次の子(名は正辰)として一七二六年に生まれました。家業は代々薬商を営むとともに漢方医。この人物の少年期、青年期についての資料は全く不明の部分が多い。

ただ「起請文」(一七六九年)が残っている。一予正辰一念発起仕二付奉神文之事―これによると博打で代金が払えず大阪の薬問屋から訴えられるなどその生活は荒廃していたことが知られます。ところが非凡なこの

人は一念発起し、独学で測量法を学び、地理に対する幼い頃からの探究心により、その念願を叶うべく旅に出ました。

そして、最初の仕事は『山野地理津河』、これは京都・大阪旅行の紀行文です。これからたまっていたものをはき出すように、歴史、故事に格別な興味を抱いて探求を深め、多くの著書を執筆していきます。この人の著書の特徴は写生図が頻繁に描かれていることです。古松軒自身がつぶさに実地見聞した証です。

紀行文の他、合戦の戦略研究、『御六戦志』、『関が原御陣地理図』又、『備中国加夜郡高松城水攻地理之図』も著しました。高松城水攻めでは堤防について、従来の説とは異なる新たな見解、水攻め堤防を約参百mに限定した図を描きました。この説は関心を集めることも無く、埋もれてしまいました。

これらは、戦記、戦場の状況を自分古戰場を訪れて研究して著したもので、多くの軍学者が実際の地理

を知らず机上で議論していることを批判しています。

古松軒には二大著書があります。

一つは『西遊雜記』(一七八三年、七卷)。天明三年(一七八三年)三月末から修験者装束で山陽道から九州への一周の旅。山陽道を三ヶ月、さらにもう三ヶ月かけて九州へ。その成果であります。これが古松軒の名を一挙に高めました。

もう一つの大著は『東遊雜記』(一七八八年、十二卷)。このときは、幕府巡見使という身分で六ヶ月かけて随行、東北地方から蝦夷松前までの旅の成果であります。

別表の「関係年表」を見れば分かるように、その著作が、後を継いで蝦夷地を測量した近藤重蔵、伊能忠敬、間宮林蔵等に影響を与えた地理学の先駆者であることが分かります。現に近藤重蔵から正確さを称賛する書簡が届いています。

◎その人柄

古松軒は自らしばしば言うように「遅まきの人」。主著はすべて五十歳を過ぎてからの労作です。この人の業績を時の老中、松平定信が知るところとなり謁見の栄誉にも浴し、彼

が工夫考案した「コンパツ(ス)」の使用法を松平定信に説明しています。

古松軒は、七十歳の時、岡田藩主から苗字帯刀を許されました。

当時は徒歩、車馬しかない時代。行程図を見れば判るとおり、徒歩をいとわず、健康で健脚であつてこそなし得たことです。

将に大器晩成型で、好学心に富み「百聞は一見に如かず」を信条として自分の足で、全国をめぐり歩きその土地の人と接し、語らい、気候、風土、自然を紀行文に著すことに専念しました。

この態度こそ地理学者と呼ぶにふさわしく、紀行文、スケッチ、日記は現在も尚、貴重な学問的資料価値を認められています。

◎結び

古川古松軒について、今後も更に資料の発掘、そしてその全集の編纂がなされることを待望するものであります。

参考文献 『近代科学をひらいた人々』岡山県立博物館特別展図録(昭和五十一年)・『西遊記』・『東遊記』平凡社刊・『研究報告5』一九八四年刊岡山県立博物館竹林栄一 他

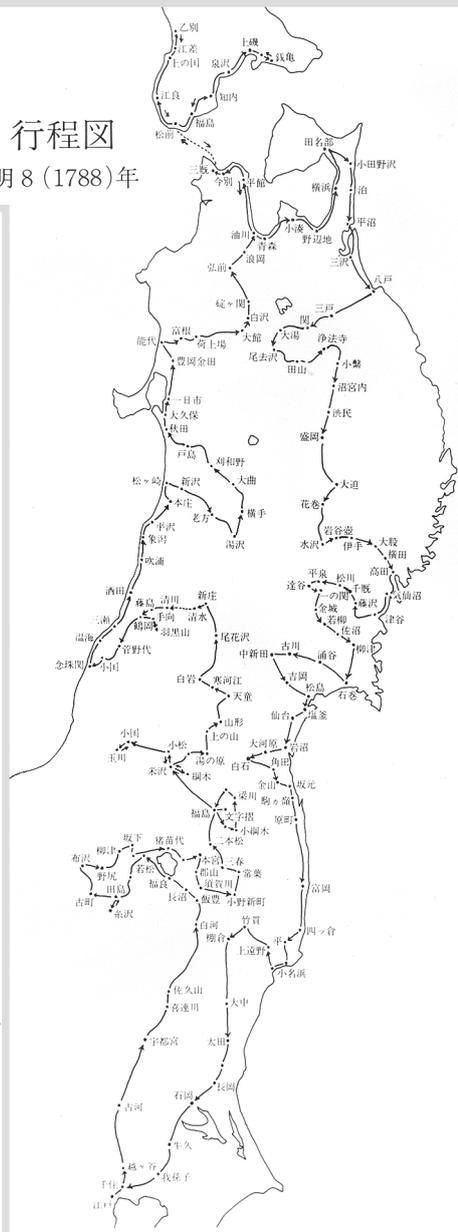
- ▶古松軒「旅姿」写し・延年筆(個人蔵、写真提供:岡山県立博物館)
- ▼古松軒肖像・岡本豊彦筆(岡山県立博物館蔵)



古松軒肖像、古松軒旅姿、行程図(西国への旅・奥羽蝦夷への旅)

奥羽・蝦夷地への旅 行程図

天明8(1788)年



西国への旅 行程図

天明3(1783)年



—— 陸行
 水行

◀▲岡山県立博物館刊 特別展図録『近代科学をひらいた人々』(S51.10.6)より転載

古松軒関係年表

和 暦	西 暦	年 齢	記 事
享保11年	1726	1	備中下道郡新本村(岡田藩)に古川譲次の子として誕生(名は正辰)
18年	1733	8	母、勝死去
宝暦13年	1763	38	京阪(京都・大阪)旅行『山野地里津河』
宝暦14年	1764	39	正月、父、譲次死去 春『遠州味方カ原戦場備之図』
明和元年			四国88カ所巡り『四国道之記』『古河見聞記』『貧乏草』
6年	1769	44	起請文(改心し、博打を止めて生活を正す決意をした)
永安 6年	1777	52	『阿州鳴門の図』
7年	1778	53	長男、譲孝、江戸へ(大笠原若狭守の典医、松田魏楽の養子となり、松田魏丹と称す)
9年	1780	55	『吉備国之大略図説』
天明元年	1781	56	讃州へ渡海。八栗寺、八島寺へ参詣(讃州牟礼高松之図) 『讃州牟礼高松之図』『古容軒東海記』
2年	1782	57	『河州千破劔赤城之図』
3年	1783	58	半年かけ西遊(修験者姿で山陽、九州旅行単独行)『西遊雑記』7巻
5年	1785	60	半年かけ筑紫旅行(九州2度目)
6年	1786	61	『名所乃家つと』『文字乃関路』『探勝雑記』『筑紫乃家津都』
7年	1787	62	『東行雑記』『関ヶ原岐阜合戦図』『関ヶ原御陣地区図』『大阪冬御陣図』
			★ 荒木文十郎(31歳)(薩摩の武士を斬り殺し、死刑となる)
8年	1788	63	半年かけ東遊(奥羽、蝦夷旅行)(幕府巡見使として随員)『東遊雑記』12巻
			『古川反古』『岡田藩々邸図』『松前蝦夷地之図』
寛政元年	1789	64	長男、松田魏丹と共に松平定信に謁見(松平楽翁公謁見録)(丁見コンバツ之見様)
2年	1790	65	『帰郷しなの嘶(信濃紀行)』
3年	1791	66	『備中国加夜郡高松城水攻地理之図』(水攻めの堤防300m)
			自分の棺を用意 棺表「古川平次兵衛橋正辰死骸」 浅ましな名利の重荷 棄てかねて 杖つくまでに 老いにけるかな
4年	1792	67	『東都以東十五勝図』
5年	1793	68	定信へ伺候(終日物語す)
			定信へ筑前箱崎之図、備前井田の図、同閑谷和意谷の図、備前の記行呈上
6年	1794	69	『武蔵野地名考抜書』
7年	1795	70	『亜細亜一大洲東極之大略図』
			岡田藩主(伊東播磨守)によばれ、苗字帯刀許可、2人扶持くださる(雑記) 松月亭の傍に草庵をむすび、竹亭と号す(真備町有井)(歌集)
9年	1797	72	『八丈島筆記』
10年	1798	73	『奥羽名勝志』5巻
			※ 近藤重蔵(27歳)国後島、択捉島調査
11年	1799	74	※ 近藤重蔵、国後島のアイヤから古松軒へ書簡(『東遊雑記』の正確さを称賛)
			※ 伊能忠敬(54歳)蝦夷地で間宮林蔵(19歳)に測量技術を教える
12年	1800	75	松平定信、『集古十種』完成
			※ 伊能忠敬(55歳)蝦夷地南海岸測量
享和元年	1801	76	※ 間宮林蔵(21歳)伊能忠敬の蝦夷の未踏地の測量
2年	1802	77	『吉備公御墳略図』『奥村先生話聞書』
3年	1803	78	『御六戦志』『大阪夏陣血戦之図』
文化 2年	1805	80	『懷中地理志』
			松平定信、『集古十種』を古松軒に贈与(8月15日付)
4年	1807	82	『地勢論』『軍勢人数論』
			11月10日 死去(墓は新本、宅源寺)
明治43年	1910		贈位(正五位)

★ 荒木文十郎 ※ 近藤重蔵、伊能忠敬、間宮林蔵

「古松軒関係年表」は、岡山県立博物館刊特別展図録『近代科学をひらいた人々』(昭和51年10月6日)、他参照して岡山歴史研究会が作成



▲左端から 山田氏、天野氏、黒田氏、久井氏 (9/10 第97回例会にて 天野会長 講演)

団体 岡山人物銘々伝を語る会

世話人 黒田輝一

岡山人物銘々伝を語る会は、平成十八年秋、現世話人の黒田輝一さんの発案で始まりました。例会は今年の十一月でちょうど百回を迎えることとなります。

きっかけは、当時、天皇の継嗣問題が世上議論されている折、必ず引用されるのが「和氣清麻呂」でした。黒田さんが和氣清麻呂の事績を勉強してみようと県立図書館で本を探したところ、ちょうど私(久井勲)の著書『和氣清麻呂』にたどり着きました。そこで、黒田さんほか数人の会合で私がお話をさせていただいたのが第一回でした。以降、岡山出身の人物(あるいは「出身」にこだわらず、岡山に縁のある人物)を対

象に、「岡山はこんな人物を輩出しているのだ」と誇りをもって語っていくのが本会の趣旨となりました。

第七回歴研サロン 岡さんが熱弁

九月十六日、『吉備邪馬台国東遷説』をテーマに講師、岡将男氏(会員)は二時間びつしりと自著を片手に熱弁を振るわれた。



▲岡将男さん2時間熱弁を振るう

こうして百回も続いたことに驚いています。どうしてこんなに続いたのかを考えるに、次のことが良かったのではないかと考えています。

①「歴史学」の勉強会ではなく、歴史上の「人物」を対象に、その人物がいかに「愛されてきたか」に光をあてて「語り合う会」であった。

②人物の事績は、本に書かれたことだけではなく、地元や関係者の間で伝承されてきたことも扱ってきた。

③したがって、皆さんが結構気ままに語り合える場になった。

④事務局の山田良三さんがその人脈を生かして、岡山の「歴史好き」の方々へ広報の大きさを物語った。

佐藤さん お疲れさま

連続講座1(五回)終了

初めての連続講座を、佐藤光範氏(顧問、八十四歳)が講師で「古代日本語・地名語から古代を学ぶ」(五回シリーズ)を開催した。延参加者は百十六名(平均二十三名)で大変好評であった。五回全て受講した



方は、十一名もいた。彼の講義は、秦氏と銅をしてヒンズー教の影響等、地名語から彼独自の理論を展開し、参加者を煙に巻いた。最終回の終了時、「今後でも元気で、研究に励んでください」と花束とお菓子が渡され、参加者と記念撮影をした。著書『はたしてハタ氏か』は、完売でした。

最終回(第5回目) 佐藤氏と記念撮影

休憩中、著書『吉備邪馬台国東遷説』サロン会が好評だった。著書の執筆の経緯は、会報第9号に掲載しています。この講演のDVD(千円)は歴研事務局に申込みください。

して下さり、回を重ねるごとに知名度が上がってきたことです。例会は常時二、三十人の出席です。更なる欲を言えば、発表していただける方の登壇を期待しています。気楽に耳学問をする場ですので、堅苦しく考える必要はありません。岡山歴史研究会さんやその他の団体さんとも連携して、切磋琢磨していきたいと願っています。(世話人代行 久井勲)

例会

毎月 第三金曜日の午後六時〜八時
場所 県立図書館二階サークル活動室
参加 会員でなくても参加可
案内 毎月木曜、山陽新聞「情報ひろば」

連絡先

電話&FAX 086・806・2525
携帯 090・1033・3327(山田)
(世話人事務局 山田良三)

第十回探訪会 讃岐探訪

十一月七日(金)秋晴れの下、四十三名がバスで讃岐を巡った。

佐藤光範さん(八十四歳、元船乗り)のガイドで、懐かしい海の歌を数曲、全員で歌い、楽しいバスツアーとなった。

宇夫階(うぶしな)神社(宇多津町)・神谷(かんだに)神社(坂出市)、高松市では・讃岐国分寺跡・久本古墳・石清尾山古墳群・田村神社を巡った。参加者の多くは行ったことがなく、興味津々であった。

宇夫階神社本殿は伊勢神宮外宮の旧多賀宮御正殿を拝戴したものである。

又、神谷神社本殿は国宝建物で鎌倉時代の様式が残っており、この時代の建築では、わが国最古である。が、境内に入れず残念。



▲讃岐国分寺跡 伽藍配置石製模型(縮図1/10)前で



▲久本古墳で記念撮影

久本古墳は、玄室に石棚付きの珍しい古墳で、田んぼの真ん中に可愛く綺麗に残る。上部には柿の木まである古墳である。

石清尾山へ続くバスでは樹木の枝が垂れ下がり、バスの屋根を擦ることがしばしば。

猫塚積

石古墳で転んだ方が三人もいたが、幸いにも怪我は無かった。昼食はうどん食べ放題にしました。中には三杯

お知らせ

講座

連続講座三(二回シリーズ)

「日本神話について」

講師 熊代哲士氏(会員 吉備の中山を守る会顧問)

日時①三月二十日(金) 十時~十二時

②五月二十九日(金) 十時~十二時

講師 田中修實氏(顧問、就実大学人文学部非常勤講師)

日時 二月二十六日(木) 十三時半~

第十回「宇喜多家の人々」

講師 天野勝昭氏(岡山歴史研究会

会長 元岡山市副市長)

日時 六月十六日(火) 十三時半~

「講座」「歴研サロン」の場所・参加費は、次の通りです。

場所 きらめきプラザ二階大会議室

(旧国立病院跡)

参加費 会員・一般 五百円

歴研サロン

第九回「岡山の戦国武将群像―『余滴中世の吉備』から―」

も食べた方もあり、一人単価八百円を超え、想定外の出費となった。

■編集後記■今回は江戸中期、の人物事件に光を当てました。人生五十年といわれた時代、五十代から活躍した古松軒にはただただ驚くばかり。身分制度の厳しい中、文十郎の心意気に爽快感あり。が、処刑されるとは時代故か。(楠 敏明)

お知らせ 第11回歴史ウォーク 熊山遺跡探訪

日時 3月28日(土)

雨天順延(3月29日)

集合 熊山山頂駐車場 10時

解散 14時半

徒歩の方

駅から車で山頂へ送迎

JR山陽本線 熊山駅

JR赤穂線 香登駅

持参 弁当・お茶

参加費 500円

探訪 熊山山頂 1.5km 弱

積石遺跡数ヶ所

案内(顧問) 佐藤光範氏

岡野進氏、野崎豊氏

参加申込 歴研事務局へ

発行 岡山歴史研究会
会長 天野勝昭
編集長 楠敏明
事務局 〒701-1332
岡山市北区平山844-86山本方
電話 086-287-6226

